

# かささぎ

通信 第105号

毎月第2金曜日 13:30~15:30

2021年 7月 9日 発行

刈谷市中央図書館研修室 参加自由

森三郎刈谷市民の会「森三郎の作品を読む会」

二〇二一年六月の「森三郎の作品を読む会」では『赤い鳥』のコラム「昔の笑話」を読みました。

『赤い鳥』に「昔の笑話」という無署名の囲み記事があります。酒井晶代氏によると、一九三二年九月号から三四年十月号までのコラムは森三郎による連載です（『森三郎童話研究—第二次「赤い鳥」との関わりを中心に—』『児童文学研究』第二十四号、一九九二年、日本児童文学学会）。全部で二二三の笑話が載っています。その中からいくつかの話を紹介します。（引用文は現代仮名遣いに変更）

▽小川へ、かえどりに出かけた子がかえってきて、「お父さん、なまずの子を、こんなにとっさりどって来たよ。」お父さんが見ると、お玉じゃくしばかりなので「ばかだね、これは蛙の子で、お玉じゃくしというものだ。なまずの子には鬚（ひげ）があるじゃないか。」「うそだい、子どもにひげがあるもんか。」（一九三三年一月号、傍点筆者）※「かえどり」は、川をせき止め魚を捕ることですが、三河では「ぼんつく」と表現することもあると、出席者の説明がありました。

▽「ほうろくや、ほうろくや。」とよんで通るのを、ある男がよびとめて、「ほうろくは一枚いくらだい。」「もう、これ一枚でおしまいですから、とくべつに十六文にしておきましょう。」「十文にまけなさい。」「いいえ、かけねはしません。」「とはねつけて、「ほうろくや。」と言うなりボタンところび、ほうろくが粉みじんになりました。男「やれやれ、買わなくてよかった。」「（一九三三年八月号）※森三郎は『赤い鳥』に掲載した笑い話や他の小話を、単行本『昔の笑ひばなし』（一九四二年、中央公論社）にまとめています。その本には「ほうろく」について「焙烙とかき、素焼きの浅い土鍋で豆をいったりするのに使います」（p.21）と注をつけています。

刈谷には「重原のほうろく」という伝説があることが参加者から指摘されました。弘法大師のお陰で焙烙の耳が欠けることがなくなったという話です（参照『続刈谷の伝説』（一九七九年）、刈谷市郷土文化研究会誌『かりや』第三十一号（二〇一〇年））。

▽ばか息子が下男をつれて、本郷の通りを歩いていきますと、空き家の札が目につきました。ばか息子「おい、あの札に何てかいてあるんだい。」「下男「はい、造作つき売家とありますが、めずらしいい字ですね。」「ううん、字よりも文句がじつにいい。」「（一九三三年八月号）※これは「売り家と唐様で書く三代目」という川柳を受けた笑い話だという指摘もありました。

森三郎がどんな本を元にして「昔の笑話」を集めたかはつきり分かりませんが、三郎は「鈴木三重吉研究Ⅱ」（『新文明』一九五九年十月）の中で、京の蘆兵衛著『滑稽類纂』（一八九九年）を種本の一冊だと言っています。その本を鈴木三重吉が手にとって見て「むずかしいんだねえ」と言ったが、それは難しいという本ではないと書いていて、三郎がこのコラムの仕事を楽しんでいた様子が伺われます。「昔の笑話」中の茗荷を食べ過ぎると物忘れをする話（一九三二年十一月号、十二月号）なども『滑稽類纂』（p.199）にあります。

▽「わしは日本一のことを考えたよ。臼で米をつくるときに、下へうちす杵は役にたっても、上る杵が何にもならない。そこで、上へも米を入れた臼を、さかさになら下げておけば、上下一しよにつけて、少しもむだがないだろう。」「じゃア、ぶら下げた臼には、どうして米をいれるんだい?」「なるほど。そこまではかんがえなかったよ。」「（一九三三年七月号、三四年二月号に重複掲載）※この話も『滑稽類纂』（p.213）に載っていて、その注に江戸時代の笑話集『醒睡笑』（安楽庵策伝）によったことが書かれています。

次回「森三郎の作品を読む会」（八月は休会）

二〇二一年九月十日（金）午後一時半～三時半 実施予定

少国民文芸選『かささぎ物語』（帝国協会出版部、一九四二年八月発行）